■美しい言葉を使はうとする努力

前に述べたやうに、「優しい言葉は優しい心を生み、荒々しい言葉は荒々しい心を生む」ものであるから、私たちは美しい日本語を使はうといふ努力をし、美しい日本語を育てる努力をする必要があると思ふ。

孔子が弟子の子路に、「先生がもしも国政を任せられたとしたら、どこから先に手をお付けになりますか」といふ質問を受けた時、「必ずや名を正さんか」と答へたことが、『論語』に見えてゐる。

この「名を正す」の“名”とは、窮極的には言葉のことであるから、「名を正す」とは「言葉を正す」といふことにほかならない。孔子のこの答へに対して、子路が、「それは何とも迂遠な事ではありませんか」と言ふと、孔子は、「名正しからざれば言順ならず、言順ならざれば事成らず」と言って、「言葉の乱れが人の心の乱れ、人倫の乱れを惹き起してゐるのであって、これこそが今の世の乱れの根本的な原因なのだ。どうして迂遠なものであらうか」と、子路を論してゐる。

言葉は人の心を養ひ、人を作るものであるから、人の住む世の中を良くも悪くもする働きを有つものである。だから、私たちは、正しく美しい言葉を使はうと努力することが必要であり、大切な事なのである。